

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月10日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520836

研究課題名（和文） 青年海外協力隊員の活動における文化人類学の活用に関する研究

研究課題名（英文） A Study of the Japan Overseas Cooperation Volunteers Program and Cultural Anthropological Knowledge

研究代表者

白川 千尋（SHIRAKAWA CHIHIRO）

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・准教授

研究者番号：60319994

研究成果の概要（和文）：本研究では、青年海外協力隊員のうち「村落開発普及員」という職種の隊員が派遣前に受ける研修において、文化人類学に関する知見が豊富に教示されていることを明らかにした。また、そうした知見のなかでも、とくに活動の対象となる人々のニーズやその背景にある社会・文化などを人々の側から掘り下げて理解するための視点、あるいは自分の活動を客観的に把握したり批判的に相対化したりするための視点といった活動のベースとなるものの見方や考え方に関わる知見が、積極的な役割を果たすものとして隊員の活動のなかで活用されている場合が多いことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The research clarified the cultural anthropological knowledge was intensively taught to volunteers of the Japan Overseas Cooperation Volunteers Program, especially those who were expected to engage in community development activities, during their training program. It also showed the volunteers tended to utilize the knowledge they obtained particularly for understanding their target people's needs, culture and society from people's point of view, and/or reviewing their activities critically from relativistic point of view.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：開発・援助

1. 研究開始当初の背景

国際協力・開発援助の分野では、地域社会に根ざした活動や住民参加型の活動が重視されるようになって久しい。こうしたなか、活動を行う側には活動を効果的なものとしてゆくために、その対象となる人々のニーズを十分に把握するのはもちろんのこと、人々

の価値観や行動様式、彼ら彼女らが担ってきた技術や知識などを適切に理解することが不可欠となっている。そして、この点との関連で国際協力・開発援助に文化人類学の関与する余地が増している。こうした動向は青年海外協力隊員の活動にも当てはまる。国際協力機構（JICA）が実施している青年海外協力

隊事業では、1965年の事業開始以降、2012年2月29日までに約37,000人の隊員が世界各地に派遣されてきた（JICA ウェブサイト、2012年4月18日閲覧）。その活動分野は農林水産、土木建築、保健衛生、教育文化などの8部門約120職種にわたるが、国際協力・開発援助と文化人類学の関係について上述した点は、これらの職種のなかでもとくに「村落開発普及員」という職種に関して当てはまると言える。

「村落開発普及員」の隊員は、2年間の派遣期間中、農山漁村や都市貧困層のコミュニティなどに単身で住み込んだり頻繁に通ったりしながら、現地語を用いて社会・経済開発分野の活動に取り組む。こうした活動形態ゆえに、彼ら彼女らの活動では活動の対象となる人々やその社会・文化を適切に理解することが不可欠となる。また、そもそもそうした活動形態は、長期間の単身滞在や現地語習得を基盤とした文化人類学のフィールドワークと共通する部分が多い。この点で、たとえば JICA や国連機関の専門家などと比べると、「村落開発普及員」の活動はとりわけ文化人類学との親和性が潜在的に高いと捉えることができる。

実際このことを反映した形で、「村落開発普及員」の隊員が派遣前に受ける普及法研修と呼ばれる研修では、文化人類学的な知見が少なからず教示されている。「村落開発普及員」を含むすべての職種の隊員が派遣前に受ける研修には、これとは別に語学学習を中心とした約2カ月間の研修があるが、「村落開発普及員」の隊員はそれに加えて普及法研修を受けている点で、派遣国で活動する前に文化人類学的知見に少なからず接していることになる。このことを念頭に置かなければ、普及法研修で教示された知見が、隊員のその後の活動のなかでどのように活用されているのかという問いが浮かんでくる。しかし、この問いに関連する研究、あるいは青年海外協力隊員の活動と文化人類学的知見の関係を検討したより一般的な研究はほとんどない。隊員の活動の内容を文化人類学的視点から検討した研究はすでにいくつかあるものの、活動における文化人類学的知見の活用の方などは検討の対象となっていない。

しかしながら、こうした研究状況に反して、すでに触れたように国際協力・開発援助の分野では文化人類学の関与する余地が増している。したがって、文化人類学との親和性が潜在的に高い「村落開発普及員」の隊員などを対象とし、その活動における文化人類学的知見の活用の方などを検討することは、国際協力・開発援助と文化人類学のより一般的な関係に関する生産的な展望を得るうえで、きわめて重要な手がかりとなる。また、研修における隊員の文化人類学的知見の受

容やその後の活動における活用のあり方を検討の対象とすることは、文化人類学の専門家ではない一般の人々の間における文化人類学的知見の受容や消費のあり方を理解することにもつながる。この点で、本研究は、青年海外協力隊事業を事例とした文化人類学の社会的位相を明らかにする試み、すなわち「メタ文化人類学」ないし「文化人類学の社会学」としても意義深いものと言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、青年海外協力隊事業における文化人類学的知見（文化人類学の視点、方法論、考え方などに関する知識）の活用のあり方を検討することによって、地域社会に密着した国際協力活動における文化人類学の役割と課題を明らかにし、国際協力と文化人類学の関係に関する新たな展望を得ることである。

3. 研究の方法

①研究対象：職種

本研究では、「1. 研究開始当初の背景」で述べた点などを念頭に置き、青年海外協力隊員のなかでもとくに「村落開発普及員」の職種の隊員を対象とした。なお、ここで言う隊員のなかには、本研究の研究期間中に派遣国で活動中の「現役隊員」だけでなく、派遣前の隊員や活動を終えて帰国した元隊員も含まれる。ただし、より広く情報収集を行うことや「村落開発普及員」との比較検討などを目的として、「村落開発普及員」と同じように地域社会に根ざした活動を行うほかの職種の隊員も付随的に対象に含めた。

②研究対象：派遣国

隊員は世界各地に派遣されているが、本研究で主な対象の一つとしたのは、カンボジア、ベトナム、ラオスの隊員である。これらの国々を対象とするのは、地域社会に根ざした活動を行う隊員がこれまでこれらの国々に少なからず派遣されてきた実績があることや、研究代表者がラオスとその近隣のタイ、ミャンマーで国際協力活動や文化人類学的調査に携わった経験があることなどによる。ただし、研究期間の初年度と2年度に上記3カ国での調査を終えたため、そこで得た情報をより一般的なコンテキストの下に位置づけるべく、これらの国々に近く、派遣されている「村落開発普及員」の隊員数が多いバングラデシュでも調査を行った。以上の4カ国では「現役隊員」を対象とした調査を行ったが、他方で国内では、それ以外の国々に派遣される予定の隊員や帰国した元隊員も対象として調査を行った。

なお、当初本研究の申請段階（応募申請書）では、主な研究対象として、保健医療協力活

動に関わっている隊員ないし関わっていた元隊員で、医師、看護師、臨床検査医技師などの特定の医療資格をもたない者を想定していた。この種の隊員は、「村落開発普及員」や「青少年活動」などの職種に少なからずみられる。しかし、本研究の研究期間中にカンボジア、ベトナム、ラオスでそうした活動を行っている「現役隊員」はほとんどいなかったため、こうした隊員を主たる対象とすることはできなかったことを付言しておく。

③ 国外調査

上述した職種・派遣国の隊員を対象として、本研究では国外調査と国内調査を主要な方法として用いた。このうち国外調査については、すでに述べたようにカンボジア、ベトナム、ラオス、バングラデシュで実施した。調査で主たる対象としたのは、これらの国々で活動中の「村落開発普及員」と、地域社会に根ざした活動を行うそのほかの職種の「現役隊員」である。

調査では、個人面談の形で活動の内容、活動で直面した問題とそれへの対応、研修で得た知見と活動との関係などに関する聞き取りを行った。また、数名の隊員については、聞き取りで得た情報を補完するべく、活動対象地での観察や、カウンターパートないし活動対象者への聞き取りなども行った。

④ 国内調査

国内調査のなかで中心的なものとして実施したのは、派遣前の隊員や帰国した元隊員を対象とした調査と、「1. 研究開始当初の背景」で触れた普及法研修を対象とした調査である。

このうち派遣前の隊員を対象とした調査では、予定されている活動の内容や研修で得た知見などについて、また元隊員を対象とした調査では、活動の内容、活動で直面した問題とそれへの対応、研修で得た知見と活動との関係などについて、個人面談や電子メールを用いて聞き取りを行った。これらの調査の対象者には、すでに触れたようにカンボジア、ベトナム、ラオス、バングラデシュ以外の国々に派遣される予定の隊員や帰国した元隊員も含まれる。

一方、普及法研修に関する調査では、研修に数次にわたって参加することを通じて、研修で教示されている知見の内容やその教示法、隊員の反応などに関する参与観察を行った。また、研修を企画運営している担当者や研修の講師を対象として、研修の目的や意図、研修内容の通時的変化などに関する聞き取りを行った。

なお、以上の二つの調査で得た知見を補完するために、隊員の活動に関する文書や電子資料の収集と検討も行った。

4. 研究成果

本研究の研究期間が終了して未だ間もないこともあり、「3. 研究の方法」で述べた一連の調査の結果得た情報の網羅的かつ詳細な分析は現在もなお進行中である。したがって、以下では暫定的な研究成果の一つとして、とくに①「村落開発普及員」の隊員に対して実施されている普及法研修とそこで教示されている文化人類学的知見、および②隊員による知見の受容と活用の2点に的を絞り、得た情報の一部を簡潔に提示する。

これら2点のうち①については、研修の期間、受講隊員数、講師、形態、教示されている知見に関する情報を箇条書きする。また、②については、研修で教示されている知見や研修全般に関する隊員のコメントと、知見の活用に関する隊員のコメントを具体的に例示する。これらのコメントは、本研究の一連の調査で対象とした隊員のうち30名（すべて「村落開発普及員」、派遣前の隊員と元隊員を含む）から得たものであり、意味が通るように隊員の発言に最低限の加筆修正を施している。

なお、最後に設けた③省察の項では、①と②で提示した情報のまとめを行うとともに、それを踏まえて本研究の目的と関わる概観的な考察を行った。

① 普及法研修

- ・ 期間
5日間、1日あたり約8時間。
隊員の派遣時期は年に4回あり、それに合わせて研修も年に4回行われる。
- ・ 受講隊員数
1回の研修あたり30～40人（研修の時期によって大幅に増減する場合あり）。
- ・ 講師
1回の研修あたり4～5人。
ほとんどが文化人類学（開発人類学を含む）を専門とする研究者。
元隊員が半数以上。
講師のうち2人が研修の企画運営者でもある。
- ・ 形態
講義（研修期間のうち3～4日）。
グループに分かれて行うワークショップ（1～2日）。
- ・ 教示されている知見（下線を付したのはとくに文化人類学に関係するもの）
ボランティアとは何か。
村落開発とは何か。
国際協力の歴史。
日本の農業改良普及事業と生活改善運動。
文化とは何か。
国際協力における文化・社会を理解することや文化・社会の多様性を理解することの

重要性と意義。

ステレオタイプ化した異文化理解や支配的開発言説への批判的視点。

エティックとエミック。

ホリスティックな視点。

相対主義的視点。

技術・技能と文化・社会の関係。

病気・医療と文化・社会の関係。

フィールドワークの重要性と留意点。

ファシリテーション手法。

Project Cycle Management (PCM) の手法。

Participatory Rural Appraisal (PRA) の手法。

元隊員の経験と知識（事例研究）。

②隊員による知見の受容・活用

・研修で教示されている知見や研修全般に関する隊員のコメント

「自分のやりたいことを「教える」のではなく、まず活動の対象となる人々のことを観察し、理解しようとしなければならないということが、研修で学んだことのなかでもとくに印象に残った」。

「村落開発普及員としての姿勢や考え方を身につけてゆくうえで、文化・社会などの全体を俯瞰する力や自分を全体的状況のなかに位置づける視点をもつことの重要性などが非常に参考になった」。

「文化人類学的視点に基づく国際協力へのアプローチの仕方や日本の生活改善活動の歴史と内容を学んだことが印象に残っており、文化人類学的視点を国際協力に取り込むことは非常に重要だと思う」。

「日本の生活改善運動の事例が隊員の活動の事例と関係するものとして取り上げられている点が強く印象に残った」。

「研修全体を通じて「相手を理解することから活動が始まる」ということが伝えられているように感じ、そのことが印象に残った」。

「途上国と先進国の間に上下関係はなく、上下関係をつくってはいけないとのメッセージが多く、講義のなかに込められていると感じた」。

「活動対象地の人々への謙虚な姿勢の醸成という点で、研修はなくてはならない通過儀礼だ」。

「「教えてやる」式の「援助」ではない関わり方を重視する文化人類学の見方・考え方に共感した」。

「研修が PCM の手法や KJ 法といった国際協力のスキルの教示だけにとどまっていたならば、個々の隊員の活動のためにはならなかっただろう。この点、研修の内容が活動の対象となる人々との向き合い方や自分の活動の把握の仕方などに重点が置かれており、非常に良かった」。

「国際協力に携わる者にとって文化人類学の考え方は非常に重要な視点であり、村落開発普及員だけでなく、ほかの職種の隊員も同様に普及法研修を受けると、国際協力に対する考え方の幅や活動の幅が広がって良いのではないか」。

「研修を受けて、広い視野をもち、自分のこれまでの経験や価値基準だけに頼らずに活動したいと思った」。

「PCM やそのほかの手法の存在を知ることができ、また実際にワークショップのなかで体験することを通じて派遣先で活用する際の難しさや留意点を実感することができて良かった」。

「PCM や PRA の手法をワークショップ形式で学べたのは良かったが、実施における問題点などをより深く議論したかった」。

「PCM の手法などについてより深く学んだり、そのほかの実践的手法を学んだりする機会がもっと多くあれば良かった」。

「研修では活動に役立つ具体的スキルの習得を期待していたが、期待外れだった」。

・知見の活用に関する隊員のコメント

「研修で取り上げられたライフストーリーの聞き取りを実際にやってみることで、活動の対象となる人々のニーズを理解できるようになり、それにそくした活動を行うことができた」。

「フィールドワークの手法や留意点（アンケートや形式的インタビューよりも世間話などの方が本音に近い意見を引き出し得る、同じ人でも周囲に誰がいるかによって語る内容が異なる、など）に関して学んだことが、実際の活動で役に立っている」。

「活動との関連で、現地のどのようなところに目配りし、着目すれば現地のことをよりよく理解できるかを事前に学ぶことができたのは良かった」。

「派遣当初、自分は何ができるかを必死に考えていたが、現地に持参した研修の資料を読み返し、自分に何ができるかではなく、まず相手が何を求めているかを理解することが重要であることを思い出すことができた」。

「派遣後1年は目にみえるような成果を残すことができなかったが、研修で活動する前にまず相手をしっかり理解することが重要であるという心構えを学んでいたので、過重なストレスにならずに済んだ」。

「ほかの隊員の活動が進んでいたりすると焦ってしまったりしがちだが、研修で「まず十分な時間をかけて相手を観察し、理解することに努めた後、具体的な活動を開始すべき」という心構えを学んでいたため、焦らずに現地の状況をしっかり理解し、やるべきことを探ることができた」。

「異文化に対する考え方・接し方などを研

修で学ぶことができたのは重要だった。抽象的な内容であり、具体的に目にみえる形では活動の成果につながりにくいものだが、もしそれを学ばずに派遣されていたならば、活動が行き詰まったり活動しづらかったりしたはずだ」。

「ほかの職種の隊員には日本で自分がやってきたことを現地でもそのまま続けてやろうとする者が多く、考え方に柔軟性がなかったり、自分の技術が受け入れられないと相手に対して反発したり「教えてあげる」という姿勢をとったりする。自分もそうなるところだったが、研修で活動を行う際の基礎的な考え方や心構え（日本の技術をそのまま現地に持ち込むことの問題、自分の価値観・考え方の相対化など）を学んでいたため、そうした姿勢をあらためることができた」。

「現地ではトップダウン型の国際協力活動が非常に多いが、そうした活動のあり方に対する自分の漠然とした疑問を理論的に考えたり、現地の人々とボトムアップ型の活動について議論したりするうえで、異文化理解の重要性をはじめとして研修で学んだことは重要な役割を果たしている」。

「現場を理解するということはすなわち、国際協力をめぐる議論や動向のなかで自分がどのような立場にいるかを客観的に把握しながら現場を理解することである」という視点を学べたことは、自分の活動を客観的に把握するうえで非常に重要だった」。

「研修では、「開発援助＝モデルの押しつけ」ではなく、そもそも開発援助とは何なのかという点について考えさせられたが、それがなければ自分は現地の人々のことを「国際協力が必要な可哀想な人々」という色眼鏡で見ていただろうし、そもそもそうした色眼鏡で見ていたことさえ気付かなかっただろう」。

「車を分解してパーツに分けて捉えるようなことはせず、そもそも車自体のあり方を考え直す必要があるという考え方は、活動を行うにあたって事前に研修で学ぶことができて良かった」。

「自分の見方・考え方と相手の見方・考え方のズレに留意することの重要性」、「生活文化が違うことによる価値観の違い」、「ものごとを多角的に捉えることの重要性」といったことは、活動を進めるに際して学んでおいて良かったことである」。

「活動を行ううえで、「相手を理解することが基本であり重要なことである」という点を学べたことは良かった」。

「現地でワークショップを企画する際に、研修で行ったPCMのワークショップは参考になった」。

「研修では住民参加型のPCM手法などを学んだが、派遣先はトップダウン型の組織構造になっており、研修で学んだボトムアップ型の手法がなじまない」。

「ワークショップで学んだいくつかの手法は現地で実際に使うことができないものであり、研修で取り上げる必要性がないのではと思った」。

「活動に直接役に立っていることはとくにない」。

③省察

①で示したように、文化人類学を専門とする研究者たちが研修の講師や企画運営者を務めていることもあり、研修で教示されている知見のなかで文化人類学に関係する知見は大きな比重を占めている。それらのなかには、情報収集の手法であるフィールドワークのノウハウのように、具体的な手法やスキルに関係するものも含まれている。しかし、知見の大半は、活動の対象となる人々のニーズやその背景にある社会・文化などを人々の側から掘り下げて理解するための視点、あるいは自分の活動を客観的に把握したり批判的に相対化したりするための視点といった、活動のベースとなるものの見方や考え方、換言すれば思想や哲学に関わるものである。

こうした知見が多くを占めているという特徴上、自分の活動に目に見える形で役に立つ「国際協力の即戦力ツール」のようなものの習得を期待している隊員からすると、それに相当するような知見はファシリテーションやPCM、PRAの手法などに限られており、研修は期待外れなものとなる。実際、②に提示した一連のコメントのうち「活動に役立つ具体的なスキルの習得を期待していたが、期待外れだった」、「活動に直接役に立っていることはとくにない」といったコメントは、この点を反映していると言える。

しかし、留意しておくべきことは、研修のそもそものねらいが、隊員に「国際協力の即戦力ツール」のようなものを習得させることにあるわけではないという点である。そのことは、研修の企画運営者でもある講師たちが、講義やワークショップのなかで折に触れて話していることでもある。むしろ研修のねらいは、教示されている知見の傾向からもみてとれるように、隊員の活動のベースとなる思想や哲学の醸成、あるいはそれにつながるような手がかりの提供にあると言える。

こうしたねらいが設けられている一因として、どのような地域・状況においても効力を発揮し得る汎用性や万能性をもった「国際協力の即戦力ツール」のようなものが現状では存在せず、仮に有効な「ツール」があったとしても、それは限られた地域・状況においてしか通用しないという「ツール」面での制

約（「ツール」の限定性・個別性）がある。隊員の派遣先は多様であり、活動内容も千差万別である。このため、個々の隊員の派遣先や活動内容に応じてさまざまな「ツール」を教示するという選択肢も想定できるが、膨大な時間と手間が必要となるため現実的ではない。このため、その代わりとして、隊員の多くに多少なりとも関わると考えられる手法やスキル、すなわちファシリテーションやPCMの手法などが教示されているわけである。しかし、それらにしても、「現地でワークショップを企画する際に、研修で行ったPCMのワークショップは参考になった」というコメントがある反面、「研修で学んだ手法は派遣先ではなじまない」、「ワークショップで学んだいくつもの手法は現地で実際に使うことができない」といったコメントもみられる点で、汎用性や万能性をもった「ツール」たり得ないことが分かる。

一方、「1. 研究開始当初の背景」で触れたように、国際協力・開発援助の分野では地域社会に根ざした活動や住民参加型の活動が重視されるようになってきている。とはいえ、隊員のなかには「国際協力が必要な可哀想な人々に先進的な技術や知識を教えてあげたい」、「途上国に欠如しているものを自分の活動で補いたい」といった考え方を無批判にもっている者が依然として少なくない。こうした状況の下では、研修で「ツール」だけが教示された場合、「隊員目線のひとりよがりな一方的技術指導」のような活動が助長されかねない。むしろ、現行の研修のように、活動の対象となる人々のニーズや社会・文化などを掘り下げて理解したり、自分の活動を批判的に捉え直したりすることに必要なものの見方や考え方を教示することに力点を置く方が適切と言える。

こうした研修のねらいとの関連で言えば、②に提示した一連のコメントからも明らかのように、研修は概して隊員から肯定的に捉えられており、教示されている文化人類学に関する知見も、研修のねらいにおおむねそのような形で受容されていると言える。このことは、「研修がPCMの手法やKJ法といった国際協力のスキルの教示だけにとどまっていたならば、個々の隊員の活動のためにはならなかっただろう。この点、研修の内容が活動の対象となる人々との向き合い方や自分の活動の把握の仕方などに重点が置かれており、非常に良かった」というコメントに端的に表れている。

他方で、教示されている知見の活用に関してみると、文化人類学に関する具体的な手法やスキルが活動のなかで活用されている例は、ライフストーリーの聞き取りやフィールドワークの手法・留意点に関する二つのコメントを除けば、みあたらない。しかし、そ

うした具体的な手法やスキルのレベルを離れ、派遣先の人々との向き合い方や自分の活動の捉え方といったものの見方や考え方のレベルに目を転じると、研修で学んだ文化人類学に関する知見が活動のなかで積極的な役割を果たしているとするコメントが多くみられる。この点を踏まえるならば、研修で教示されている文化人類学的知見は、ものの見方や考え方といったより抽象的なレベルにおいて活用される場合が多いことが分かる。

以上に述べてきた諸点は、いずれも「村落開発普及員」に関するものであり、そこからは文化人類学的知見がこの職種の隊員の活動において重要な役割を果たし得ることが窺える。しかし、国際協力・開発援助の活動のベースとなる思想や哲学の醸成という役割の普遍性を念頭に置かなければ、「国際協力に携わる者にとって文化人類学の考え方は非常に重要な視点であり、村落開発普及員だけでなく、ほかの職種の隊員も同様に普及法研修を受けると、国際協力に対する考え方の幅や活動の幅が広がって良いのではないか」という隊員のコメントが示唆するように、文化人類学的知見は「村落開発普及員」だけにとどまらず、そのほかの職種の青年海外協力隊員の活動において、ひいては地域社会に根ざした活動を行うそれ以外の実践者の活動においても、重要な役割を果たす可能性を秘めていると言えよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 白川千尋「文化人類学と国際医療協力のつながり・へだたり—KAPサーベイをめぐって」佐藤寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学—冷戦・蜜月・パートナーシップ』明石書店、査読無、2011、84-103

〔学会発表〕（計1件）

- ① 白川千尋「ボランティアへの視座—趣旨説明に代えて」国立民族学博物館機関研究プロジェクト『支援の人類学』国際シンポジウム『グローバル支援の時代におけるボランティア—東南アジアの現場から考える』2011年11月5日、国立民族学博物館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白川 千尋 (SHIRAKAWA CHIHIRO)

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・准教授

研究者番号：60319994